

日本の旧海外植民地と図書館

——東南アジアの図書館接收問題をを中心に(未定稿)——

加藤 一夫

- はじめに
- | | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 図書館界と南方関与・南洋問題 2. 南方調査・情報収集の拠点としての台湾 3. アジア太平洋戦争と図書館・研究機関の接收 | <ol style="list-style-type: none"> 4. シンガポールのラッフルズ博物館・図書館接收と資料保護 <ol style="list-style-type: none"> 1) ラッフルズ博物館・図書館概観 2) 図書館接收と資料保護 5. 図書・研究資料の略奪と返還問題
むすびにかえて |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

はじめに

第二次世界大戦終結からすでに50余年が過ぎた。この戦争がもたらした政治、経済、社会の面で衝撃や具体的な被害・損害については、これまですでにかなり明らかにされて、文化の面でも、例えば、教育問題では多くの研究がなされてきた。ここでとりあげるのは、図書館や文化機関が果たした役割についてであり、それを通して日本と近隣アジア諸地域の歴史的関係を見直すことであるが、この問題はなお歴史の「空白」となっており、「戦後処理」問題の外に置かれている。

戦争は、図書館や博物館、美術館のような文化機関に多くの被害を与えてきた。建物が破壊され、焼き打ちされ、資料の略奪もしばしば行われた¹⁾。図書館は、たしかに戦争の遂行に直接には役立ちはしなかったが、もっぱら被害者・犠牲者という視点だけで歴史を総括するのは一面的であるように思われる。戦略的な側面からの研究・調査という点で戦争に協力し、一定の役割を果たすこともありうるのである。本稿は、このような問題意識に立って、戦後50年を過ぎてもなおその実態がよくわからない東南アジアの図書館問題を通して先の戦争の意味を考える試みのひとつである。

周知のように、近代日本は、西欧近代がたどった道を取り、近隣・周辺諸国を侵略し領域を拡大することで発展してきた。社会における図書館の存在は、こうした近代の文化施設であり、ある意味で社会的インフラ施設の一つともいえる。とすれば時間をかけてその地域の主権を確立してはじめて建設され機能するものである。その意味で、台湾、朝鮮半島、中国東北部(旧満州)では、日本人支配の下で多様な図書館が

存在して、当時においては、本国以上に活発な活動が行われ、多数の資料を収集し管理し、それを多くの人々が利用していた²⁾。

ところが、南洋・南方といわれた東南アジアや南太平洋諸島には、そうした条件は存在しなかった。ここでは、主権をまず日本の軍事力によって掌握し、その支配下で図書館活動を実現しなければならなかった。図書館を建設する余裕はそこにはなかった。そこではヨーロッパの旧宗主国が建設した図書館を接収し、資料を確保し、管理してその図書館と資料を日本のものとするという活動の方向が中心となった。小論では、アジア太平洋戦争期に東南アジア諸国で行われた図書館及び博物館などの文化施設と学術機関の接収活動、そのなかで独自の位置を占めているシンガポールのラッフルズ博物館・図書館の活動を中心に、植民地と図書館の関わりについて考えてみることにしたい。これは、筆者自身が継続している「日本の旧海外植民地と図書館」の研究と調査過程における中間報告の一部である。

1. 図書館界と南方関与・南洋問題

日本人の南方関与については、すでに江戸時代の末期より国防の観点から一部の知識人が注目していたが、一般の人々が本格的に関心を寄せるのは明治以後である。1895年(明治28)4月、日清講和条約によって日本が植民地台湾を領有し、アジアに目が向けられるにつれて、主として経済と産業面での要請から南方が注目されるようになり、やがて歴史や文化のつながりにも関心が持たれるようになった。ここで南洋ないし南方とは、現在の東南アジア地域と、第一次世界大戦までドイツが領有し、その後日本が占領したマリアナ、カロリン、マーシャルの各諸島からなる太平洋諸島を示している³⁾。

実をいえば、図書館界で、この南方が注目されることはあまりなかったといっている。それでも、ようやく大正になって、いわゆる「南進論」が一種のブームになると、図書館員も南方の意味について関心を抱くようになった⁴⁾。当時は日本人の移民も盛んな時期で、これとの関連でも南方が注目を集めるようになった。そして現地での日本人教育・日本語教育の重要性が高まるにつれて、南方関係の文献が、例えば、日本図書館協会の機関誌『図書館雑誌』や図書館員の研究会誌『図書館研究』などに散見するようになる。

こうしたなかで、1916年(大正5)10月、山形県鶴岡町(当時)で開催された第11回全国図書館大会で、当時の大橋図書館理事であった坪谷善四郎が「図書館よりみたる南洋」というテーマで講演して、図書館人の南方関与を促した。この講演は、自身の80余日にわたる南方への調査旅行を踏まえて、インドネシアのジャワの重要性について述べたものである。すなわち、ジャワと日本の歴史的な関係、例えば、江戸後期に流行した蘭学は、最初はオランダ領ジャワから輸入したもので、鎖国体制下ですら日本人の南方関心は高かったとして、今後のジャワの可能性を強調し、日本文明のこ

れからの海外飛躍の重要性を訴えたものであった。背景には、日本人の経済進出や移民問題も存在していた。講演の「就いて御研究あって国力の発展に伴ひ、南洋方面の雄飛を望みたい為に、以上図書館より見たる南洋の一端を御参考にまで申上げました」という結びに彼の問題意識が示されている⁵⁾。

しかしながら、その後も図書館人の南方・南洋への関心はそれほど広まることはなかった。当時、台湾では、南方拠点の意識から南方への関心が強まっており、台湾の図書館人の間ではかなり関心が高かったが、国内の図書館人はどちらかというとも無関心であった。

ところが、この時期には、経済活動の必要から資料・情報収集の重要性に気づき独自の活動を行う企業や産業団体が現われてきた。その一つに1915年(大正4)1月に東京で生まれた「南洋協会」がある。この協会の趣意書には「本会は、汎く南洋の事情を研究して、其の開発に努め、以て彼我民族の福利を増進し、聊か世界の文明に貢献せんと欲す……」とあり、また、この協会の規約第3条第9項の一つに「南洋博物館および図書館を設くること」とある。この協会は、その後、機関誌『南洋協会会報』や調査報告『南洋研究叢書』などを刊行し、マレー語等の語学講習会なども盛んに行なって、次第になかば公的研究開発機関の役割を果たし、南洋開発と南方進出に寄与するようになった⁶⁾。とはいえ、この協会が図書館や博物館を設置して運営したという証拠はない。

南方・南洋地域に図書館がなかったわけではない。日本人学校に作られた図書館・図書室は存在していたからである。しかし、当時、図書館は国内では社会教育施設であり、その活動も社会教育の一環に位置づけられていた。南方の日本人入植地では、学校教育はあっても社会教育は存在しないとされていて、当時の植民地の教育関係年鑑などには社会教育の項目がなく、したがって、そこで図書館が独自に活動する基盤は存在しなかった⁷⁾。

しかしながら、1940年(昭和15)以後、「大東亜共栄圏」の旗印のもとで、南方への武力進出が具体化するにつれて状況に変化が起こってくる。翌年末にアジア太平洋戦争が勃発すると、図書館員の職能団体で図書館活動をリードしてきた日本図書館協会も時局に乗って南方について明確な姿勢をとることになった。

1942年(昭和17)3月、シンガポール占領の勝利の美酒に酔いしれている状況下で、南洋各地の図書館事情を紹介した山下隆吉(ペンネーム:山下太郎)に対して日本図書館協会(当時の総裁は松平頼寿)は、「日本図書館協会総裁賞」を与えている。この賞は1940年の「皇紀二千六百年」を記念して設けられたものであった。(ちなみに、翌年1943年には第2回受賞者の一人に、「満鉄奉天図書館の創設並びに経営」に尽力したとして衛藤利夫を選んでいる。)⁸⁾

山下は、1924年(大正13)生まれ、新潟県立図書館から台湾総督府図書館を経て、この当時、後述する「南方資料館」の館員になっていた。受賞作の「南洋各地の図書館」は、当時の情勢下で書かれた図書館事情として大変興味深い。論文は4回にわたり、第1回は、「極東フランス学院図書館」、第2回は、「比律賓(フィリピン)国立図

書館」、第3回は、「泰国(タイ)国立図書館」、第4回は、「新嘉坡(シンガポール)ラッフルズ図書館」であった⁹⁾。

これらの論文を執筆するにあたり、山下はつぎのように書き出している。

「帝国の生命線南洋の大陸よりの関門をなす仏西の地には、今や我が無敵皇軍が進駐しており、多年にわたる白人の桎梏より東亜の諸民族を解放して、大東亜共栄圏の完璧を期する日本と、あくまでも旧秩序の殻を墨守して帝国の新秩序建設を阻止せんとする英米との関係は、日に悪化の一途を辿り、正に一触即発の危機に直面して居り、いつ太平洋の波濤が狂乱して南洋の天地に大変化を見るも計り難き情勢になっている。

この時に当たり吾々職を図書館に奉ずる者として、まづ南洋の図書館施設の現状を知って置くことは必要事であると思われる¹⁰⁾」

山下は、その受賞後も、さらに4回にわたり、「南方文献と目録上の諸問題」について、南方関係資料の整理や目録上の問題点を展開した論文を連載している¹¹⁾。そのなかで、例えば、「我が大東亜建設の聖業の進捗と共に……」という状況での関わりを至る所で強調したり、「この為に南方文献の完全なる整備利用を遺憾ならしむる事こそ、吾々図書館員に課せられたる大東亜建設工作の一分野を分担する職域奉公の道ではないかと思うのである」と決意を述べている¹²⁾。ここに当時の図書館人の問題意識が象徴的に示されているといえよう。事実、山下だけではない。こうした状況に対応して、多くの図書館人や図書館が、また書誌学者が、南洋・南方関係の書誌を編集・発行している¹³⁾。こうして、戦争での緒戦勝利という情勢で、初めて図書館人は南洋・南方への関心を具体的に示すことになる。

だが、図書館人がこの地域で活動する余地はすでになかった。戦時期の図書館活動は、次第に文献資料の防護対策、図書の間開などに追われていくからである。したがって、南方での活動は、軍に協力していた文化人や研究者の手にゆだねられることになる。

2. 南方調査・情報収集の拠点としての台湾

南方に行く前に、台湾に少し立ち寄ってみたい。日本最初の海外植民地台湾では、先に触れたように、日本の国内以上に活発な図書館活動が行われていた。その中心を担ったのは台湾総督府図書館であった。1941年12月の太平洋戦争開始時に、総督府図書館を含めて全島で私立・公立図書館が94館を数えた。

周知のように、台湾は日清講和条約によって日本に帰属することになったが、その地理的位置から、これ以後、日本の南方関与や南進論の拠点となった。当然、ここに居をかまえる図書館や調査機関、高等教育機関もこの方向で積極的に活動した¹⁴⁾。

その中心となった台湾総督府図書館は、1914年(大正3)に総督府移転後の建物を使用して同年8月に開館したものである。この図書館は、その前年の勅令によって、

設立目的の一つに「殊ニ本島ノ位置ニ鑑ミ南支南洋等ニ関スル研究資料ハ普ク蒐集シ、以テ一般読書家以外特殊ノ専門家、実業家等ノ研究調査上益スル所アラシメム」としており、いわば公共図書館にして調査図書館でもあった。1927年（昭和2）からは、第4代館長、山中樵の活躍で図書館活動は飛躍的に発展し、同年、台湾図書館協会が発足し、全国図書館協議会も開催され内地の図書館員との交流も行われた。総督府図書館の蔵書は、最初、東洋協会台湾支部の蔵書と総督府官房文書課から移管したものから出発したが、1941年（昭和16）には18万冊を超えていた。戦争末期にアメリカ軍の爆撃で蔵書の約30%が焼失したが、主要なものは無事残り、現在、国立中央図書館台湾分館（1996年に国家図書館台湾分館と改称）に収蔵されている¹⁵⁾。

日本のアジア進出と「大東亜共栄圏」のスローガンとともに、南方調査・南方資料収集はさらに盛んになり、1940年（昭和15）には、このために財団法人「南方資料館」が設立された。同機関は当初、台湾出身の実業家が出費し、総督府が設立し、運営には南方協会が当たったが、その後の戦争という情勢の変化に対応して翌年に独立した組織となった。最初に約4万冊の蔵書を総督府外事課から借り、独自に3,000冊を収集した。戦時に資料を疎開したため、戦火を免れて、現在、国家図書館台湾分館に「南方資料館資料」として4万冊以上が収蔵されている¹⁶⁾。

南方情報収集と南洋研究のもう一つの拠点は、1928年（昭和3）に設立された台北帝国大学（現在は国立台湾大学）である。理数系を主とする大学であったが、ここに南方研究機関として熱帯医学研究所、南方人文研究所、南方資源研究所が設置されて、日本の南進政策に協力していた。この図書館は、戦禍を免れ、現在の国立台湾大学に文庫として保存されている¹⁷⁾。

1930年代以降、日本の南方関与が具体化するにつれて、南方調査機関も増えていった。アジア太平洋戦争開戦時のその主なものに、例えば、台湾では台湾南方協会、台湾拓殖株式会社調査課、台湾技術協会、台湾銀行調査課、それに先に触れた南方資料館などがあり、これらを支えるものとして、東京にも東洋協会、南洋協会、南洋産業調査会などが存在して、南洋関係について多くの雑誌、報告書、研究書を刊行していた。さらに、戦時経済を推進するため設置された内閣直属の組織である企画院傘下の東亜研究所（財団法人）も豊富なスタッフを抱えて調査活動を行っていた¹⁸⁾。

ところで、その調査・研究の質はどうだったのだろうか。一般的に言えば、その水準はかなりのものではあるが、テーマは時流に便乗したものが多く、すなわち資源獲得のための市場調査的なものが圧倒的で、結果として、南方占領地における政策には役立たず、この地域の住民や民族の生活についての切り込みは浅かったといっている。それゆえ、実際に武力で占領してみると、統治政策は、日本文化・日本語の押しつけを主とするいわば日本文化との同化を強制するという方向が顕著となった。その意味で、これらの機関でなされた「調査研究」が「大東亜戦争」の理論武装としての役割を果たすことはあまりなかったようである。しかも、戦争が激化するにつれて、だいに内向きの排外的ナショナリズムの色彩が強まり、軍部に都合のいい調査・研究が主流を占めていった。

これに対して、最近、当時のアメリカの情報政策・情報収集の実情が明らかにされているが、当時の敵国アメリカでは、多量の日本の図書（特に『東洋年鑑』、『新英和大辞典』などのレファレンスブック類）を復刻して、積極的に研究し、戦争を通して「日本学」、「中国研究」、「東南アジア学」の方向を追求していた。戦争はネガティブな意味での「文化交流」であると位置づけ、「敵から学ぶ」という問題意識のもとで調査や情報収集が積極的になされていた。そのことが戦後の対日政策や戦後処理に大きな影響を与えることになった¹⁹⁾。

ところが、戦前の国内の図書館運動は、とりわけ1930年代以後は、国策にそって「思想善導」の一環として「読書運動」を展開し、図書館を拠点とする自由な調査・研究の芽をつみとる「思想統制」の役割を果たした。戦時下には「戦争を勝ち抜くための図書館活動」として英語を敵性語よばわりし、学習や閲覧を規制したりして、外に目をむける余裕は次第になくなっていった。この点では、台湾も同様であった²⁰⁾。

1943年1月、先の南方資料館は、機関誌『南方資料館報』を刊行するに際して、「南方建設の聖業はあくまでも遠謀深慮なる見通しと、周到なる科学的調査研究とに立脚せる恒久的事業でなければならぬ²¹⁾。」と高らかに宣言しているが、戦争末期の南方・南洋での引き際などからみて、こうした調査・研究・文献情報収集は大きな限界をもっていたといわざるをえない。

3. アジア太平洋戦争と図書館・研究機関の接収

1941年（昭和16）12月、マレー半島からシンガポールを攻略した日本軍は瞬く間に東南アジア全域を掌握した。この時から敗戦までの約3年半、日本軍はこの地域を統治することになる。その状況を見ると、占領がイギリス領の香港・マラヤ（マレーシア・シンガポール）、ビルマ（ミャンマー）、米領フィリピン、オランダ領東インド（インドネシア）であり、事実上占領していたフランス領インドシナ（ベトナム、ラオス、カンボジア）、その他、日本に協力した独立国タイがある²²⁾。

南方軍は、かねてからの方針にしたがって、この地域で、政治、経済、産業、教育・文化のすべての面で、統治に踏み切った。占領後、政府の南方政策審議会が答申した「文教政策」の項目には「文化ニ関スル方策」として次のような文章が発表されている。「日本文化ヲ顕揚シ広ク其ノ優秀性ヲ認識セシムルト共ニ現地ニオケル新聞、ラジオ、映画文化施設ノ普及、医療等厚生施設ノ充実、図書館、博物館、植物園ノ整備ヲ図リ且内地ヨリ優秀ナル学者、研究者、技術者ヲ派遣シテ現地に有識者ト共ニ文化向上ヲ促進シ渾然タル大東亜文化ノ創造ヲ培フ²³⁾」。現地の研究機関・博物館・図書館などの接収もその一つに位置づけられていたと思われる。そして、その中心人物は、南方軍顧問（事務嘱託）として現地入りした田中館秀三であった。

田中館秀三は、旧姓下斗米、1884年（明治17）岩手県生まれ、東京帝国大学理学部地質学科卒の火山学・地質学者であった。東北帝国大学農科大学（札幌、現在の北海

道大学) 講師を経て東北帝国大学法文学部講師、1922年(大正11)に東京帝国大学教授田中館愛橘の養子となる。国際火山学会で活躍し、1927年(昭和2)からヨーロッパ各地に留学、その後、ブラジルなどで火山調査活動に従事、1941年(昭和16)には海南島、仏領インドシナ、シンガポールなどで地質調査をしている。戦後は東北大学や法政大学で教鞭を執り、1951年(昭和26)に67歳で死去している²⁴⁾。

田中館が文化・研究機関接収の責任者になった経緯は定かではない。誰がどのようにに任命したか不明な部分も多い。その目的はどこにあったのだろうか。帰国後、戦時中の1944年(昭和19)に書かれた接収記録『南方文化施設の接収』では、その辺について「余は元来〇〇調査の命令を受けて居たのであるが、然し予備調査としてマライに於ては大英帝国の経営百余年、蘭印に於てはオランダの統治三百年、其の間の調査研究の資料を参考にする必要に迫られた。それで其等資料の散逸を防ぐことはシンガポール進出の第一の目的であった」とかなり曖昧に記している²⁵⁾。研究者としての自身の信念であったのかもしれない。

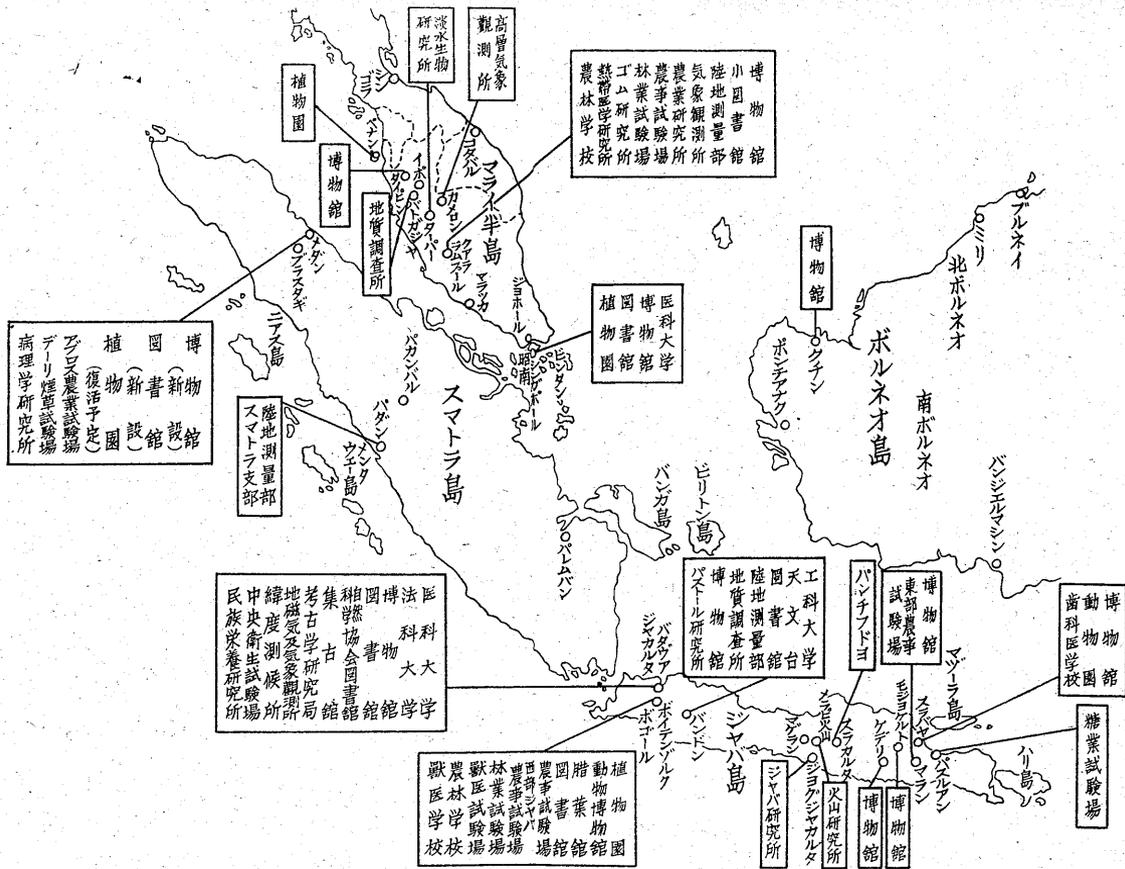
彼は、シンガポール占領翌日の2月16日にサイゴン経由で軍の飛行機で現地入りし、18日からラッフルズ植物園やラッフルズ博物館・図書館(昭南博物館)などの接収を開始している。彼によれば、第25軍最高司令官山下奉文から「口頭辞令」によって博物館と植物園の「館長・園長」になったとしているが、最後まで正式辞令を受けることはなかった。

この辺の事情について、彼は帰国後、「口頭辞令」は自分が勝手にやったと、友人に漏らしているし、昭南博物館の正式館長として1942年(昭和17)9月に赴任した南方軍最高顧問の徳川義親(侯爵)は、田中館の肩書きはまったくの「自己任命であった」と述べている²⁶⁾。軍が彼を事務嘱託に任命したのは、前年この地域に地質調査にきており、この地域に詳しいという理由であったのかもしれない。

ともあれ、田中館秀三の行動記録に沿って図書館や研究機関の接収過程をみてみよう。

1942年2月サイゴンからシンガポールへ入った彼は、シンガポールを拠点としてまずシンガポールの文化・学術施設を接収した。その後、3月20日～4月15日には、マレー半島、オランダ領東インド(インドネシア)に出張、そこに滞在して、現地で日本軍や日本の調査機関(例えば、南方文化研究会、東亜経済研究所など)と協力して、各地の文化・文化機関を接収した。さらに6月26日～7月14日にマライに出張している。その記録は以下の通り(固有名詞の表記は田中館『南方文化施設の接収』による。括弧内は田中館のコメントを簡単にまとめたもの)。(次頁の図を参照)

まずシンガポール。戦場となった島である。ラッフルズ植物園(昭南植物園と改称、オーストラリア軍の本部であったため内部は荒れていた)、ラッフルズ博物館・図書館(昭南博物館と改称、後述)、シンガポール地積局(シンガポール攻防戦で荒れていた。製図室の機材や地図などを博物館に移す)、ラッフルズ専門学校(図書は一部を市の教育課に、一部は昭南博物館に移す)、キング・エドワード7世医科大学(日本軍が占領して図書と研究資材を保管)²⁷⁾。



田中館秀三『南方文化施設の接収』 時代社 1944 見返し所収

次に、マライ（マレー半島）。ここも戦場となった地域である。クアラ・ラムプール博物館（図書は完全に保存されていた）、ペラ博物館（タイピン博物館と改称、約3,000冊の図書は略奪されず無事）、ペナン植物園、マライ連邦測量局（地図、図書とも無事）、カメロン高原地高山気象観測所、マライ連邦地質調査所（図書はほとんど消失）、クアラ・ラムプール熱帯医学研究所（図書館の医学雑誌がかなり紛失）、クアラ・ラムプール農業研究所（図書室の図書の多くは紛失）、セルダン農事試験場（図書はほとんど紛失）、クアラ・ラムプール林務局及びケポン林業試験場（研究図書の大部分は無事）、センチール木材試験所、クアラ・ラムプール・護^ゴ護研究所（図書は大部分無事）、ペラ州ターパー淡水生物研究所（図書の大部分が無事）、カメロン高原地栽培試験場（図書はほとんどない）、ペナン図書館（田中館は不明としているが、この図書館はペナン攻防戦で破壊された）。マラッカ図書館、クアラ・ラムプール図書館²⁸⁾。

つづいてオランダ領東インド（インドネシア）。占領地であるが戦場にならなかった地域である。まず、ジャワ。ジャカルタ博物館（付、ジャワ各地考古学博物館、附属図書館の蔵書はよく保護されており、ジャカルタ法科大学の蔵書も収容した）、古文書館、集古館、考古学研究局、ジャワ研究所、バンチ・ブドヨ（文化の家）、モジョバイト考古学協会、王立オランダ自然科学協会図書館（1931年以来、田中館は日本人で唯一人の会員であった。ここに南方文化研究室を置いた）、バンドン図書館（日本兵が257冊を持ち出したが、リストあり、その後は持ち出しなし）、ボゴール植物園（ジャカルタ海洋研究所図書室ではかなりの図書がなくなっていた）、ジャカルタ法科大学（図書1万2,000冊以上をジャカルタ博物館内の図書館に移動）、バンドン工科大学（オランダ軍司令部があったため、荒らされて図書がかなり紛失）、レンバン天文台、チリリタン緯度測候所（望遠鏡が盗まれたが、のち見つけて昭南博物館に収蔵）、ジャカルタ医科大学（図書・資料の被害なし）、バンドン測量局（多少の略奪あり）、王立磁気及び気象観測所（図書4,000～5,000冊が略奪される）、バンドン地質調査所（図書、研究資料とも無事）、パストール研究所、エックマン研究所（田中館は立ち寄らず）、民族栄養研究所、癌研究所、ボゴール諸試験場、バスルアン砂糖研究所、メラピ火山観測所²⁹⁾。

最後にスマトラ。メダン博物館、メダン図書館（昭南博物館のように市内各所から図書運び入れる）、スボランギット植物園、メダン病理研究所（図書はかなり持ち出されていた）、アブロス試験場、メダン・デーリ試験場（軍政部メダン煙草研究所と改名³⁰⁾）。

以上の接收施設のうち、主要な博物館や研究所には、その後、日本軍が研究者を司政官として任命し管理させている。

4. シンガポール・ラッフルズ博物館・図書館の接收と資料保護

1) ラッフルズ博物館・図書館概観

1941年12月8日、南方軍第25軍は、マレー半島のコタバルに上陸、シンガポールに

向けて進撃を開始した。日本海軍による真珠湾攻撃に先立つこと1時間50分前、「大東亜戦争」の開始である。10日に日本軍はマレー沖海戦で勝利して制海・制空権を確保した。最高司令官は第25軍司令官の山下奉文、総数約10万の将兵がマレー半島を南下して、18日にはマラッカ海峡に臨む要衝ペナンを陥落させ、破竹の勢いで進撃を続け、やがてシンガポールの対岸に到着し、ジョホールバルを占領した。

シンガポールは、1819年、イギリス東インド会社のスタンフォード・ラッフルズが上陸して以来、イギリスの植民地・自由港として建設され、「東洋のジブラルタル」と呼ばれ、アジア太平洋の要塞として重要な軍事的拠点となっていた。

1942年（昭和17）2月15日。ジョホール水道を渡った日本軍が、島を防衛していた約10万人のイギリス、インド、ユーラシア、華人の連合軍を撃破して降伏させた。この時から1945年（昭和20）8月18日までシンガポールは日本軍の統治下に入った。2月17日、日本軍はこの島を「昭南島」、シンガポール市は「昭南特別市」（市長は北支最高顧問であった大達茂雄）と改称され、翌日から「帝国領土として軍政を施行」することになった³¹。

当時、ここには宗主国イギリスが建設し管理運営していたラッフルズ博物館・図書館があった。この施設は接収されて18日に「昭南博物館」と改称された。

この博物館・図書館について、1941年の先に触れた山下論文（註9参照）と、1983年刊行のK. K. Seetの著作“*The Place for the People*”（その内容から『シンガポール国立図書館史』と訳す。ラッフルズ博物館・図書館は、1955年に分離して、図書館の方はラッフルズ国立図書館となり、1960年からシンガポール国立図書館となる）から、図書館部分の概要を紹介しておこう³²。

ラッフルズ博物館・図書館は、マレー総督として赴任し、南洋の動物・植物の大蒐集家としても知られているラッフルズを記念して設立されたものである。1844年頃のシンガポール市内には、私立の会員制貸出図書館が設置されてシンガポール（新嘉坡）図書館と呼ばれていた。1874年に公費経営の公共図書館にするとの条件で政庁に譲渡され、その年、海峡植民地政庁は自然科学を主な対象とする博物館を図書館と合わせて設置することを決定した。そこでシンガポール公共図書館が引き継がれることになり、当時の総督アンドリュー・クラークが、この施設をラッフルズ図書館・博物館と名付けたものである。当初、市庁舎の2階にあったが、1887年にスタンフォード街とオーチャード街の交差点に新館が建設され、その後、1904年から増築も行われて、1907年2月に開館し、会員制図書館として公開された。1874年の蔵書数はわずか3,000冊であったが、その後次第に増加していった。

シンガポール図書館が有名になるのは、ローガン・コレクション（“*Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia*”の編集者として有名な海峡植民地ペナンの文人、J. R. ローガンが集めた図書）とロスト・コレクション（東洋学の権威として著名なイギリス・インド局図書館長のR. ロストの私設文庫、東洋言語、とりわけサンスクリット語関係の図書が中心）という東洋学関係文献を持ったことである。これまでラッフルズ図書館・博物館という名称であったが、1910年にラッフルズ博物館・図書

館となった。また、1895年から1919年まで博物館長兼図書館長であったカール・R・ハニッチによって参考図書館にして公共図書館となり、アジア有数の図書館として、マレー半島の先端にラッフルズ図書館ありとして世界中に知られるようになった。1920年から専任の図書館長が置かれ、1921年には蔵書が3万3,200冊となり、図書館は三つの部門に分かれた。レファレンス図書館、ノンフィクション貸出図書館、フィクション貸出図書館である。1923年には会員制の児童図書室(約1,000冊)も設置された。山下論文によると、この図書館は、1930年代より通俗図書館の性格を持つに至り、かつての地位を失いつつあるとしているが、『シンガポール国立図書館史』によれば順調な発展を遂げていたとあり、この点では多少評価は分かれている。

2) 図書収集活動と資料保護

1942年(昭和17)2月15日にシンガポールが陥落すると、このラッフルズ博物館・図書館も日本軍の管理下に置かれ、先に述べたように昭南博物館と改称された。この施設をめぐる興味深いエピソードがあり、戦後、この博物館・図書館の様子を描いた回想記、記録、物語、ドキュメントなどが書かれている³³⁾。とりわけ有名なのは、陥落前のシンガポール植物園副園長で、後にケンブリッジ大学名誉教授となる生物学者E. J. H. コーナー博士の回顧録である。戦後に出された『シンガポール国立図書館史』は、このコーナーの回顧録に依拠して書かれている。また、戦前シンガポール従軍記者であった動物作家戸川幸夫は、この博物館・図書館をめぐるドラマを「物語」にし、「押し寄せる暴力の波に抵抗し人間としての尊厳を守り抜いた誇り高き男たちの伝説」(本の宣伝帯の言葉)という「美談」にまで高めている。以下、この間の状況について簡単に触れておこう。

1942年(昭和17)2月16日、田中館秀三がシンガポールに入り、17日に市役所で打合せを行い、18日から博物館・図書館の接収に乗り出した。この施設は連合軍の宣伝本部があったため、2月8日の日本軍の空爆で図書館の一部が被弾しており、内部はかなり荒れていた。当時、この博物館には、先のコーナーの他に、R. E. ホルタム(元シンガポール植物園園長)、W. バートウイッスル(元シンガポール市庁水産局長)がいた。田中館は、このイギリス「敵性人」を活用して、この博物館・図書館を管理し、研究資料や図書の散逸と略奪を防ぐことになる。4月28日付「南方軍第25軍政実施要綱」にはイギリス人については、「帝国ノ施策ニ同調シ軍政実施ニ進シテ協力スルモノハ之ヲ使用スルヲ妨ケス」とあり、これにより、彼らは「敵性人誓約書」を出して、「捕虜」の身分で協力することになったのである³⁴⁾。

コーナーの回顧録は、この時から日本の敗戦までを記録したもので、それによると、まず田中館は、図書館資料保護を明記した「山下將軍の命令書」(博物館・図書館の資料を無断で持ち出さないという内容)を手に入れ、博物館・図書館の資料を整理し、これを守ることを第一の課題とした。

つづいて、市内の建物から本を博物館に移す活動を積極的に行った。要するに、空になったビルに入ってそこにある本を「略奪」して、博物館内に入れるというもので

ある。この活動には、3月に軍から派遣されてきた3人の研究者、昆虫学の江崎悌三九州帝国大学教授、植物学の本田正次東京帝国大学教授、地質学の大家弥之助東京帝国大学教授も参加した。後に正式任命でやってきた徳川義親もこれに参加している。さらに、12月末に陸軍司政官であり発光細菌の研究者である羽根田弥太（後に昭南博物館館長）、京都帝大名誉教授の郡場寛（後に昭南植物園長）がシンガポールに入りこれに参加している。彼らは昭南博物館で研究のため派遣されたのである。この活動をコーナーは「逆略奪」とし、戸川幸夫はこれに参加した研究者たちを「聖なる略奪者」として讃えている。その「略奪記録」は、コーナーの回顧録の原著の付録に場所と内容記録が残っている。

それによると、海峡植民地政庁の図書館（農業局、教育局、水産部、森林局など9部局の図書館蔵書を接收）、他の公共図書館、（オーストラリア貿易事務所、アメリカ領事館、オランダ領事館、ラッフルズ大学、国際連盟東洋支部など17機関の図書館・図書室の図書・資料を接收、これにはクアラランプール・ゴム研究所の資料も搬入、後に植物園に移している）、法律事務所図書館（グラッドル兄弟の事務所など6事務所の図書を接收）、個人蔵書（シンガポール攻防戦前に逃亡した図書館・博物館館長や副館長、海峡植民地の役人、大学教授、新聞経営者など多数、とくに不明者のものが圧倒的に多い）³⁵⁾。

この活動により、コーナーによれば4万冊を超え、さらにその後、倍の8万冊になったという³⁶⁾。田中館は、軍当局や市当局に次に「略奪」に入る建物と蔵書を手紙で事前に知らせ、「許可」をとっている³⁷⁾。これに対して、日本軍もトラックを出して運搬に協力している³⁸⁾。

1943年（昭和18）7月に田中館が帰国し、その後、敗戦まで、羽根田が昭南博物館館長、郡場が昭南植物園園長となるが、この活動はその後も継続された。

周知のように、占領下のシンガポールでは、積極的な文化・教育政策が展開されていた。ここでは、研究者、文化人、ジャーナリストたちが重要な役割を果たしていた。例えば、作家の井伏鱒二、詩人の神保光太郎、東京帝大講師の中島健蔵らが日本語の普及に奔走していた。国中の知識人や作家、ジャーナリストたちが動員されていたのである。こうした背景がなければ、この図書接收活動も実現しなかったであろう³⁹⁾。

ともあれ、コーナーは、「博物館・図書館は8万冊以上のあらたな蔵書をかかえて、占領下を生きのびた。シンガポールとマラヤの復興に図書館の果たした役割は計りしれない。本を生かしたのは、博物館を英国に返す日に備えて、それが名誉ある返還であることを願い、国境とイデオロギーを越えて学問に奉仕した人々である。私たちはそれを忘れてはならぬ。」と述べている⁴⁰⁾、『シンガポール国立図書館史』も「その3年半後の1945年9月5日に博物館主任クアン・アー・グンがユニオンジャックを掲げた時、だれもがラッフルズ博物館・図書館が戦争の嵐をうまくぐり抜けたことを知ったのである。その功績は、学問と知識の旗を高く掲げて人種、文化、イデオロギーの障害を克服した勇氣ある男たちにある」と讃えている⁴¹⁾。

もっとも、こうしてラッフルズ博物館・図書館の図書・資料が無事守られたという

「美談」だけで事をすますことには問題がある。この事実の背景にある問題も無視できないからである。つまり、博物館の外側では、連日、華人への「大検証」が実施され、多くの人々が虐殺された。また華僑献金などを強制して経済的にも締めつけていたという事実もある。さらに日本軍の占領維持が次第に厳しさを増していくなかで、ジャワやタイ、ビルマへ送る「ロームシャ」狩りも実施され、多数の犠牲者を出していたという事実もある⁴²⁾。

また、「資料を破壊から守った研究者」という背景にある問題を考える場合、この博物館・図書館が戦略的に重要な機関であったということは無視することはできない。いわば軍事戦略の調査機関としての役割を果たしていたのである。実際、この図書館では、その後の日本軍のインドやオーストラリア進攻準備のために図書館資料を使って関係資料の翻訳をさせていたし、博物館についてはより重要な位置が与えられていたようである。

博物館については、「南方防疫給水部」（七三一細菌戦部隊と関係した組織といわれている）との関わりが問題になる。日本占領当時、昭南博物館で研究していた研究者たちの中には、これに関係した者もいた。例えば、当時昭南博物館で研究し、敗戦まで博物館長であった羽根田は、そこで発光魚に関する発光細菌の研究を行っていたが、軍の依頼で発光バクテリアの開発を行い、日本軍が接収して管理していたキング・エドワード7世医科大学にあった「南方防疫給水部」に通ったという⁴³⁾。もっとも、「給水部」と昭南博物館との組織的關係や具体的な研究内容について明らかにしうる確たる資料が今のところ存在しているわけではない。関係者は黙したまま世を去り、関係資料も廃棄されてしまったからである。この問題の調査・研究は、したがって、今後の課題となるが、要するに、戦時においては、博物館のような文化機関でさえも戦争遂行に動員・利用されたということである。

これと関連して、「南方科学委員会」の問題もある。これは「大東亜共栄圏」内のすべての研究機関を統合して、軍部に協力するための機関であった（団長は赤松要東京商科大学経済学部教授）。1943年夏に昭南博物館でその代表者が集会を開いている。いずれにしても、この博物館は、戦争遂行上重要な意味をもっていたのである。この点で「学術」面での総括も重要であるが、この問題も「戦後処理」の「空白」の一つになっている⁴⁴⁾。

5. 図書・研究資料の略奪と返還問題

古来、戦争によって貴重な資料が焼かれたり資料が略奪されたことは、かの古代アレクサンドリア図書館が紀元前48年のカエサルによる「アレクサンドリア戦役」で灰塵に帰したこと、また「ムーゼイオン」（学術研究センター）もその後、同様の運命をたどったことでよく知られている⁴⁵⁾。その後の歴史をみると、戦争によって美術品や研究資料・書籍などが焼かれたり、略奪されることが古今東西で行われてきた。17世紀

に起こった三十年戦争では、多くの文化財が勝者の手によって略奪され、あるいは安く買いたたかれてヨーロッパ各地に移動し、この戦争で北イタリアを含めた中世以来の神聖ローマ帝国の巨大な遺産が奪われて各地に霧散したという記録も残っている⁴⁶⁾。

第二次世界大戦でも、戦場となったヨーロッパ各国の都市の図書館や文化遺産の多くが被害を被ったが、例えば、勝者であった旧ソ連によりドイツ文化財が略奪されて、250万点という想像を絶する数量で、今もって返還されていないことが明らかになっている⁴⁷⁾。さらに、フランスによるユダヤ資料の返還など、50年を過ぎた現在でも清算がなされておらず、国際問題になっている⁴⁸⁾。

それだけではない、冷戦以後に起こった最近の旧ユーゴスラヴィア・ボスニア紛争では、「民族の記憶」を抹殺するために、国立図書館をはじめ各都市の図書館や博物館も完全に破壊された⁴⁹⁾。

アジアにおいても同様で、先の大戦では、日本軍のマレー進攻作戦の際、例えば、ペナン島攻防戦でペナン図書館が被害を受け、3万2,000冊の半分が略奪されたという記録がある⁵⁰⁾。歴史を遡ってみると、わが国は、隣国の朝鮮・韓国との関係で、例えば、16世紀末の豊臣秀吉による朝鮮出兵（文禄・慶長の役）に際して多数の漢籍（朝鮮本）を略奪している⁵¹⁾、アジア太平洋戦争でも朝鮮や中国で略奪を行っている⁵²⁾。東南アジア諸国でも同様である。これについての全体的な問題は、例えば、松本剛の研究『略奪した文化—戦争と図書』などで明らかにされているので、ここでは、細かに触れないことにしよう⁵³⁾。ただ、略奪の実態については、当然ながら証拠がなく不明・不透明な部分が多い、ということを指摘しておきたい。

日中・アジア太平洋戦争時での図書・研究資料の略奪とその返還については、敗戦直後の連合軍総司令部発の命令に、その一端をかいま見ることができる。1946年3月、占領軍は民間財産管理局（CPC、初代局長は米軍のタンゼン准将）を設置したが、その任務の一つに「在日連合軍および敵国の財産、日本が旧日本占領地域または領土から略奪した財産の管理」があった。CPCの下に返還諮問委員会が作られて活動したが、その後の2年間で、この委員会の審査に基づいて約1億5,000万円にのぼる財産が返還された⁵⁴⁾。ここでは、CPCが返還を要求した東南アジア地域の略奪財産（Looted Property）について、GHQ・CPCの指令覚書（SCAPIN 885、1083など）から簡単に触れておこう。

この指令覚書は、旧植民地の地域全般にわたっているわけではない。中国関係が主で、数も多いが、台湾、旧満州、朝鮮半島の部分は存在していない。南洋・南方はわずかしかない。ここでは、南方・南洋に関連する指令文書の一覧をあげることにしよう。これらの指令覚書には、それぞれ、英語・日本語で、内容説明がなされているが、ここでは項目だけを挙げるにとどめる⁵⁵⁾。

1. 英領ソロモン群島

●1946年8月27日 指令第312、1号 ラバウル高等法院より持ち去られた法律文書

について

●1947年2月6日 指令第386.6号 英領ソロモン群島及びニューギニア島ラバウル農務省より持ち去られた図書返還について

●1947年5月20日 指令第095号 ラバウルのF. B. フィリップ氏所属の図書について

●1948年1月15日 指令第461号 ソロモン群島ラバウル農畜水産省図書館より持ち去られた図書及び雑誌について

2. フィリピン共和国

●1947年3月6日 指令第461号、フィリピン諸島気象局所属図書の件

●1947年3月28日 指令第386.6号 フィリピン共和国に図書及び博物館標本を返還の件

●1947年6月2日 指令第461号 比島より持ち去られたイーデー・ヘスター氏所属の図書について

●1947年6月3日 指令461号 比島労働省所属の法律図書について

●1948年9月15日 指令461号 マニラの科学協会所属の科学出版物、専攻論文専門向報告書及び一般向報告書について

●1949年4月12日 指令第386.6号 マニラのC. J. クーク所属の絵画について

3. 和蘭領東印度（インドネシア）

●1946年2月28日（指令番号なし）バタビヤ磁気気象観測所図書室より持ち去ラレタル資料ニ関スル件（昭和21年3月31日文部省発学1118号、学校教育局長ヨリ地方長官、学校長宛）

●1946年10月29日 指令第461号 蘭領東印度バンドン土木交通省所属の書籍について

●1947年1月10日 指令第461号 蘭領東印度バタビヤのアイジクマン協会所属の図書に関する報告について

●1947年2月11日（指令番号なし）バンドンのバスター研究所より持ち去られた図書の件

●1947年3月4日 指令第461号 和蘭領東印度において押収せる図書を和蘭政府に返還の件

●1948年1月17日 指令第461号 蘭領東印度より持ち去られた地質学図書について

●1949年3月24日 指令第386.6号 科学標本及び図書の和蘭への返還について

4. ビルマ

●1946年3月7日（指令番号なし）「ラングーン」大学ヨリ日本軍ニ持去ラレタ科学装置並ニ図書調査ニ関スル件（昭和21年3月文部省発学138号、学校教育局長ヨリ地

方長官、学校長宛)

- 1946年12月16日 指令第461号 ビルマ・ラングーンのジャドソン大学G. E. ゲイツ博士所属の図書について
- 1947年9月18日 指令第461号 ビルマ国ナムツ在住W. モール、コール氏所有の書籍について
- 1947年9月18日 指令第461号 ラングーン大学図書館より持ち去られた図書について
- 1947年9月22日 指令第461号 ラングーン大学ユニバーシティー・カレッジ図書館より持ち去られた図書及び文書について
- 1947年9月23日 指令第461号 ビルマ政府税関化学部所属図書雑誌について
- 1947年9月22日 指令第461号 ビルマ国マングレー所在インターミディエイト・カレッジ所属の書籍について
- 1947年9月26日 指令第386. 6号 ビルマより持ち去られた図書返還について

5. マレー連邦国

- 1946年9月13日 指令第312. 1号 日本軍の馬來占領中喪失した科学文献について(蚊とマラリヤに関する昭和16年の調査研究記録。昭和18年12月15日、日本軍憲兵によって接收)
- 1946年10月28日 指令第312. 1号 マレー連邦国のH. D. ヌーン氏所有の科学文献について
- 1947年4月30日 指令第000. 3号 シンガポールのラッフルズ博物館図書館より持ち去られた財物について
- 1947年9月23日 指令第386. 6号 マライ、セランゴール博物館より持ち去られた「F. M. S. 博物館誌」について
- 1948年1月18日 指令第461号 馬來より持ち去られた図書及びパンフレットの梱包
- 1948年3月25日 指令第461号 英国政府に対する馬來の図書返還について

6. その他

- 1948年3月3日 指令第386. 6号 戦時中被占領諸国より持ち去られた文化財及び図書に対する全国的探索について

このような返還指令によって、大学や研究機関、図書館などの関係機関が、その後、返還を行ったが、具体的にどの程度、返還を行ったのか、またその実態はどうだったのか。現在でもなお不明な部分が多い⁵⁶⁾。

戦後になって、最後の帝国図書館長であり国立図書館長でもあった岡田温は、当時を回想して「軍の戦果が南方に及ぶにつれ、欧文を主とする南方接收図書も数を増した」という証言をしているが⁵⁷⁾、当時、この資料を整理した図書館員の証言によれば

1943～1944年頃に南方占領地で確保した資料が香港経由で本国に搬入され、その数3万から4万冊であったという。もっとも多い中国からの資料を合わせて、帝国図書館の接收資料は約9万5,000冊であった⁵⁸⁾。

ところで、その返還作業を行った本国にいた図書館人らの体験と発言から、先に触れたシンガポールの昭南博物館（ラッフルズ博物館・図書館）の「美談」との関係が問題になる。例えば、GHQの命令で返還のための目録を作成した帝国図書館員の回想につきのような発言があるからである。

「ラッフルズ（シンガポールの昭南博物館）なんかは非常に多くて、後々までも石黒さんや笠木さんが苦勞してあれを送り返したんですよ」「あれは万という数でしょう」「数え切れないですよ。薄いものもいっぱいあったし……」⁵⁹⁾。

もし、これが事実だとすれば、先の「美談」はどうなるのだろうか。『シンガポール国立図書館史』では、参考図書500冊が略奪されたとして、次のような記述がある。「冊数が増えるにつれて、また重複本が増大するにつれて図書館での分類や整理は不可能となった。しばしば図書館を訪れる日本人の利用者が排架ミスを犯すものだから混乱し、そのことが日本人によるちょろまかしを容易にさせた」[「図書館の蔵書が増大すると、東京からやってきたジャーナリスト・グループは、図書館の蔵書の一部を東京に送るよう強く言い寄った。コーナーが素早く対応して、これは阻止することができた」⁶⁰⁾。田中館の報告書にも、図書館の図書を持ち出す、様々な事例について触れている⁶¹⁾。持ち出されたことは確かなのである。

国立国会図書館の専門資料部憲政資料室所蔵のGHQ・CPC（民間財産管理局）文書で、この時に作成した所蔵リストをマイクロフィッシュでみることができる。たしかに返還先所在リストに「ラッフルズ博物館・図書館」の名があるが、そのリストの内容については、今のところ不明である。リストは、膨大で英文タイプのものや手書きのものが混在し、マイクロフィッシュの撮影不鮮明の部分も多く、明らかに判読不明な箇所も多い。このリストの大半は、中国・香港、他にフィリピン、タイ、インドネシア、ニューギニア、英領ソロモン群島、などであり、大学が意外に多い。所属不明（Unknown）が多いのも特徴であるが、これらはどこへどのように返還したのだろうか。本稿が調査過程の「中間報告」という所以である。

もし、そこにラッフルズ博物館・図書館（昭南博物館）への「万単位」のリストが発見されたとしたら、先の昭南博物館での「美談」は成り立たなくなるのではないだろうか。万単位となれば、組織的でないと持ち出しは不可能だからである。同じ建物の別のルートから略奪されたのか、あるいは、違う施設からのものをラッフルズ博物館・図書館として記録したのか、整理した図書館員たちの勘違いなのか、いずれにせよ、このミステリーの謎の解明は今後の課題ということになる。

むすびにかえて

以上、アジア太平洋戦争期に日本の研究者が行った図書館や文化施設の接収動向と問題点について触れてきた。ここでとりあげたのは、東南アジア諸国の一部でしかもほんの氷山の一角でしかない。フィリピン、インドネシア、タイ、ビルマ、旧フランス領インドシナのカンボジアやベトナム、それに南洋群島や他の地域の問題も残されている。これらの図書館や文化施設、研究機関、大学などがどのように日本占領に対応したのだろうか。とりわけ戦争末期に戦場となった太平洋地域、フィリピンなどの状況はどうだったのだろうか。

アジア太平洋戦争期の海外植民地における図書館状況が筆者の関心領域なのだが、膨大な一次資料のある台湾、中国東北部(満州)、朝鮮半島とは違って、資料がない南方地域はよくわからず、推測の域を出ない部分も多い。接収あるいは略奪図書について、特に略奪図書は、中国本土や朝鮮、香港とは違って組織的というより個人的に持ち出したものが多いようである。したがって、証拠も残されていない。こうした状況でGHQ・CPC文書からその「証拠」を捜し出すには、かなりの時間と労力がかかりそうである。

筆者は、1995年に香港(香港大学、各図書館等)、1996年にタイ(国立図書館、国立公文書館)を訪ねたが、いづれも当時の資料が未整理のままであるだけではない、高温多湿の東南アジア地域の気象条件から資料の劣化が著しく、ほとんど利用できない状態になっていた。これは台湾総督府の歴史資料にもいえることで、南方・南洋関係の資料の状態から、調査や利用が不可能になるタイムリミットは近づいている⁶²⁾ということを最後に強調しておきたい。

註

- 1) 戦時期の図書館の一般情勢については、『戦争と図書館』清水正三編、白石書店、1977年を参照。
- 2) 日本の海外植民地図書館について、朝鮮半島は河田いこひ「アジア侵略と朝鮮総督府図書館—もうひとつの近代日本図書館史序説」(1~5)『状況と主体』140~144号、1980~1981年。宇治郷毅「近代韓国図書館史の研究—開化期から1920年代まで」『参考書誌研究』第30号、1985年9月。同「近代韓国図書館史の研究—植民地期を中心に」『参考書誌研究』第34号、1988年7月。中国・旧満州については、岡村敬二『遺された蔵書—満鉄図書館・海外日本図書館の歴史』阿吽社、1994年、台湾については、宇治郷毅「台湾の図書館」『近代日本図書館の歩み—地方編』日本図書館協会編、1992年、855~866頁などをみよ。
- 3) 日本人の南方関与、南洋関心、いわゆる南進論については、矢野暢『「南進」の系譜』中央公論社、1975年。同『日本の南洋史観』中央公論社、1979年などを参照。
- 4) 大正期の南洋関心については、矢野暢、前掲の他、同「大正期『南進論』の特性」『東南アジア研究』第16巻1号、1978年6月、26~28頁が詳しく分析している。
- 5) 『図書館雑誌』第29号、1917年2月、15~20頁
- 6) 前掲、矢野暢『日本の南洋史観』102~105頁

- 7) 学校教育については、小島勝「南洋における日本人学校の動態」『東南アジア研究』第18巻3号、1980年12月、104～119頁などをみよ。
- 8) 『図書館雑誌』第36巻6号、1942年6月、404頁
- 9) 『図書館雑誌』第35巻4～5号、8号、11号、1941年4～5、8、11月を参照。
- 10) 同上、第35巻4号、501頁
- 11) 山下太郎の「南方文献と目録上の諸問題」は、1. タイ国人名と目録上の諸問題（『図書館雑誌』第36巻7号、1942年6月、380～383頁）、2. マレー関係文献と目録上の諸問題（同、第272号、1942年7月、508～515頁）、3. 前置語を有せる和蘭人著者の採り方に就いて（同、第36巻12号、1942年12月、310～314頁）、4. 東印度文献と目録上の諸問題（同、第37巻5号、1942年5月、333～336頁）
- 12) 同『図書館雑誌』第36巻7号、1942年7月、515頁
- 13) 例えば、天野敬太郎『大東亜資料総覧』大雅堂、1944年。『南方関係文献目録』日比谷図書館 1943年など
- 14) 台湾と南方との関わりについては、さしあたり、後藤乾一『近代日本と東南アジア—南進の「衝撃」と「遺産」』岩波書店 1995年、第2章、78～118頁をみよ。
- 15) 台湾総督府図書館については、前掲、宇治郷毅「台湾の図書館」855～861頁
- 16) 台湾における南方調査と資料収集については、以下を参照、吉久明宏「南方関係文献・書誌の書誌」『アジア・アフリカ資料通報』、第22巻2～3号、1984年5～6月。同『台湾時報』掲載南洋関係記事索引』『アジア・アフリカ資料通報』、第23巻3～4号、1985年6～7号。同『南支那及び南洋情報』総索引』『アジア資料通報』、第24巻9～10号、1986年12月～1987年1月
- なお、当時の南方調査団体は、『南洋関係文化経済団体要録 昭和13年度版』南方経済研究所、『東亜調査並研究団体概要 昭和16年』同研究所編、1942年。『東亜調査関係団体要覧 昭和16年』東亜研究所、1941年などで知ることができる。
- 17) 中林隆明「戦前期台湾における南方研究とそのコレクション」『アジア・アフリカ資料通報』第22巻10号、1985年1月、32～36頁
- 18) 同上、34頁
- 19) 奥泉栄三郎「米国は戦時中、多量の日本図書を復刻していた—日米の情報活動の差が改めて明白に」『世界週報』第78巻5号、1997年2月18日、50～54頁
- 20) 30年代、及び戦時中の図書館活動や図書館の実態については、奥泉和久「戦時下における『読書指導』の展開」『図書館界』第46巻1号、1994年5月、2～22頁。また香内信子「戦時下の図書館運動—読書指導論とその批判」『図書館学会年報』第27巻3号、1981年9月、89～96頁。同時期の台湾の状況については、『図書館と共に36年—木山人山中樵の追想』山中正編、1979年、96～106頁をみよ。
- 21) 『南方資料館報』第1号、1943年
- 22) 日本軍の東南アジア占領状況については、『東南アジア史のなかの日本占領』倉沢愛子編 早稲田大学出版部、1997年
- 23) 石井均『大東亜建設審議会と南方軍政下の教育』西日本法規出版、1994年、85～89頁
- 24) 『田中館秀三—業績と追憶』田中館秀三著 田中館秀三業績刊行会編 世界文庫、1975年、図書館・文化施設接収の記録から、なぜかマライ（マレーシア）とオランダ領東インド（インドネシア）の部分が除外されている。

- 25) 田中館秀三『南方文化施設の接収』時代社、1944年、序2頁
- 26) 24)に同じ、4、22頁
- 27) 25)に同じ、第一編、3～85頁
- 28) 同上、第二編、86～131頁
- 29) 同上、第三編、132～223頁、また、インドネシアでの調査活動については、柘植秀臣『東亜研究所と私 戦中知識人の証言』勁草書房、1979年をもみよ。
- 30) 同上、第四編、224～246頁
- 31) シンガポール占領期の状況については、『昭南新聞 1942—1945 日本占領下のシンガポール 重要紙面・縮刷版』横堀洋一編 五月書房、1993年。篠崎護『シンガポール占領秘録—戦争とその人間像』原書房、1976年。『昭南特別市史—戦時中のシンガポール』シンガポール市政会編著、日本シンガポール協会、1986年
シンガポールにおける当時の教育・文化の状況については、明石陽至「日本軍政下のマラヤ・シンガポールにおける文教施策—1941～1945年」。前掲、『東南アジア史のなかの日本占領』、293～329頁。また K. K. Seet, *A Place for the People*, Times Books International, (1983) (本文中では『シンガポール国立図書館史』と記した。)
- 32) 前掲、山下太郎『新嘉坡ラッフルズ図書館』『図書館雑誌』第35巻11号、1941年11月791～795頁、K. K. Seet, op. cit. pp. 1～74
- 33) E. J. H. コーナー著 石井美樹子訳『思い出の昭南博物館—占領期シンガポールと徳川侯』中央公論社、1982年。『友情は戦火をこえて—博物館を戦争から守った科学者たち』石井美樹子作 山中冬児絵 PHP 研究所、1983年。戸川幸夫『^{シンガポール}昭南島物語』上・下読売新聞社、1990年
- 34) 前掲、『昭南特別市史』、序論、23頁
- 35) E. J. H. Corner, *The Marquis, A Tale of Syonan-to*. Singapore, Heinemann Asia, 1981. Appendix I
- 36) コーナー、前掲書、42頁
- 37) Corner, op. cit., Appendix II
- 38) K. K. Seet, op. cit., p. 82
- 39) 例えば、桜本富雄『文化人たちの大東亜戦争—PK 部隊が行く』青木書店、1993年。川村湊『海を渡った日本語—植民地の「国語」の時間』青土社、1995年、第3章、77～98頁。宮脇弘幸「マラヤ・シンガポールの皇民化と日本語教育」『岩波講座近代日本と植民地』(第7巻 文化のなかの植民地)、1993年などを参照。
- 40) コーナー、前掲書、43頁
- 41) K. K. Seet, op. cit, p. 85
- 42) 例えば、『日本軍占領下のシンガポール—華人虐殺事件の証明』許雲樵・蔡史君編、田中宏・福永平和訳、青木書店、1986年などをみよ。英国人を優遇した点については、民族差別という指摘もある。『外国の教科書の中の日本と日本人—日本の高校生がシンガポールの中学校教科書を翻訳して再発見した日本近代史』石渡延男・益尾恵三編、一光社、1988年、172頁をみよ。
- 43) 小田部雄次『徳川義親の十五年戦争』青木書店、1988年、159～175頁。「南方防疫給水本部」と昭南博物館の関係については、資料として、常石敬一編訳『標的・イシイ731部隊と米軍諜報活動』大月書店、1984年。研究書として、常石敬一『医学者たちの組織犯罪 関

東軍七三一部隊』朝日新聞社 1994年

- 44) 「南方科学調査委員会」については、羽根田弥太の回想メモがある。前掲、『昭南特別市史』210～212頁。なお、学術の戦争責任については、『大学とアジア太平洋戦争 戦争史研究と体験の歴史化』白井厚編、日本経済評論社、1996年参照。大学をファシズムの被害者とみる視点がここでもやや強い。
- 45) モスタファ・エル＝アバディ著 松本慎二訳『古代アレクサンドリア図書館—よみがえる知の宝庫』中央公論社、1991年、第5章、143～182頁
- 46) ヒュー・トレヴァー＝ローパー著 樺山紘一訳『絵画の略奪』白水社、1985年参照
- 47) コンスタンチン・アキンシャ、グリゴリイ・コズロフ著 木原武一訳『消えた略奪美術品』新潮社、1997年
- 48) 安達功「歴史見直しの中でユダヤ人美術品の返還進めるフランス」『世界週報』1997年9月9日、10～11頁
- 49) ドウブラヴガ・ウクレシイチ著 滝口みほ訳「榴弾片と書物」『現代思想』第25巻14号、1997年12月、46～65頁
- 50) K. K. Seet, op. cit., p. 75
- 51) 李俊杰著 林昌夫訳「日本による朝鮮本の略奪について」『図書館雑誌』第82巻8号、1988年8月、454～456頁
- 52) 日本占領下の朝鮮における図書・資料略奪については、李龜烈著 南永昌訳『失われた朝鮮文化 日本侵略下の韓国文化財秘話』新泉社、1993年、IV 漢籍と日本アカデミズム、137～160頁を見よ。中国については、前掲、岡村敬二『遺された蔵書……』80～124頁
- 53) 松本剛『略奪した文化—戦争と図書』岩波書店、1993年。また、安達将孝「第一、第二次大戦中における日本軍接収図書」『図書館界』第33巻2号、1981年7月、68～75頁
- 54) 松本剛、同上、16頁
- 55) ここでは、『日本占領及び管理重要文書集』第1～2巻、外務省特別資料部編、1949年。「宣伝出版物の没収方に関する総司令部覚書」『終戦教育事務処理提要』第2～3集、文部省大臣官房文書課編、1946～49年。『GHQ指令総集成』監修竹前栄治 エムティ出版 1994などによった。前掲、安達将孝論文「第一次、第二次大戦中……」73～74頁に東南アジア関係のリストが掲載されている。

なお民間財産管理局 (CPC) ファイル (BOX ④～⑤、4088～4252) CPC16288～16299に帝国図書館が作成した返還図書リストがある。

- 56) アジア諸国の返還状況の一端については、松本前掲書、238～242頁参照。
- 57) 岡田温「終戦前後の帝国図書館」『図書館雑誌』第59巻8号、1965年8月、279～280頁
- 58) 『岡田先生を囲んで 岡田温先生喜寿記念』岡田温先生喜寿記念会編・刊、1979年、(図書館の歴史と創造 1) 39頁。また、住谷雄幸「占領軍による押収公文書・接収資料のゆくえ」『図書館雑誌』第83巻8号、1989年8月、437頁
- 59) 前掲、『岡田先生を囲んで 岡田温先生喜寿記念』、40頁
- 60) K. K. Seet, op. cit., pp. 82～83
- 61) 田中館、前掲、『南方文化施設の接収』72～73頁
- 62) 坂本勇「消えゆく南方地域にある歴史史料—沖縄県・台湾」『びぶろす』第44巻8号、1993年、1～6頁

(かとう かずお 静岡精華短期大学国際文化学科教授)